



スポーツボランティアプログラム

「事後学習 (障がい者スポーツ)」

2017/2/17

スポーツボランティアプログラム「事後学習 (障がい者スポーツ)」

2月17日(金)、南大沢キャンパスにて、スポーツボランティアプログラムの「事後学習」を実施しました。この事後学習は、今年度のスポーツボランティアプログラムの活動がすべて終了した後、これまでの活動を振り返り、他のメンバーと共有することで、自分自身の想いと向き合ったり、多角的な視点からボランティア活動の効果と意義を考えることで、活動を学びと成長につなげることを目的に行いました。連携団体である東京都障害者スポーツ協会の方にもお越しいただき、共に振り返りを行いました。

「ココロ (キモチ)」の振り返り

最初は、「ココロ (キモチ)」の振り返りとして、感情面の振り返りを行いました。活動の中で、「最も感情が動いた場面」をまずは各自で考え、その後、グループで共有しました。「最も感情が動いた場面」として、「迫力ある競技を間近で見ることができ、スポーツとしてのかっこよさ、魅力を感じた」「障がいのある人が生き生きとプレイしていて、障がいのある人へのイメージの変化があった」などの意見が挙げられました。また、「障がいのある人と関わる上で注意することなどが分からず、悩む場面があった」など、ネガティブな感情をもった場面も挙げられました。活動を振り返り、ポジティブな感情もネガティブな感情も両方の観点から、自分自身の気持ちと向き合うことができたようです。

「アタマ」の振り返り

次に、「アタマ」の振り返りとして、今回取り組んだボランティア活動の効果・意義について各自で考え、その後、グループで共有しました。

そして、そこで挙げられた効果・意義を①ボランティア自身、②課題の当事者・活動の対象、③活動する組織、④地域・社会、といった対象別に分けて可視化しました。

<①ボランティア自身にとって>

- ・障がいのある人に対する知識や理解が深まり、関心が高まった
- ・様々な障がい者スポーツを知ることができ、スポーツの可能性を感じた
- ・積極的に話しかけることで、コミュニケーション能力が高まった
- ・ボランティア自体へのイメージが変わった

<②活動の対象者にとって>

- ・楽しんでもらうことができた
- ・障がいのある人に対する見方・イメージが変わった

<③活動する組織 (東京都障害者スポーツ協会や首都大) にとって>

- ・質の高いボランティアの確保ができ、スポーツ大会の運営がスムーズにできた
- ・障がい者スポーツのボランティア活動の周知・PRにつながった
- ・受け入れる協会職員の成長につながった
- ・スポーツボランティアにおける首都大の知名度UP

<④地域・社会にとって>

- ・日常生活において障がいのある人への見方が変わった
- ・自分たちが障がいのある人のサポートをしているところを誰かが見ること、その人の意識が変わるかも

活動前後の自身の変化

最後に、事前学習 I で作成した「首都東京をどのような街にしたいか、その中に自分をどのよ

うに位置づけたいか」という「ボランティア宣言」と、自身の力に関する自己評価を振り返り、発表しました。中には、「コミュニケーション能力はあると思っていたが、障がいのある人と接した際に声をかけられなくて、まだ力が足りていないことに気づいた」など、事前より自己評価が下がるケースもありました。実践の中で自分の力と向き合い、変化があった様子が伺えます。

参加学生の声

「事後学習」全体を通して、参加した学生からは、「活動をしている時にはあまり考えていなかったことについて考えることができたほか、自分が見落としていた部分に気づくことができた」「事前学習の際は、活動の対象者や地域のことを考えるほうが多かったが、事後である今は、自分が得られたことのほうが多かったと気づいた。もっと継続すれば、また他者への意義を考えられるのではないかと考えた」などの感想が聞かれました。学生たちはこの活動を通して、スポーツボランティアに関する知識や技術だけでなく、ボランティアそのものに対する学びも深めることができたようです。

今年度の活動は、これで終了になりますが、希望者は、新規メンバーを支える「サポーター」として2年目も継続することができます。どのような形でもいいので、それぞれが今回、学んだことをそれぞれのフィールドで活かしてほしいと願っています。

